

当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

第6回基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー 「文化遺産」の人類学

日時：2011年2月12日（土）14:00-17:30

場所：東京外国語大学本郷サテライトオフィス7階会議室

発表者と発表題目：

1) 阮 雲星（浙江大学法学部・公共管理学部教授，浙江大学無形文化遺産研究センター副センター長兼任／国立民族学博物館外国人研究員）

「現代中国における無形文化遺産保護の言説と実践—「文化生態」論と「文化生態保護エリア」実験を中心に—」

2) 菅 豊（東京大学東洋文化研究所教授）

「キメラ化する地域文化—中国浙江省における政治と「古鎮化」現象をめぐって—」

要旨：

1) 「現代中国における無形文化遺産保護の言説と実践—「文化生態」論と「文化生態保護エリア」実験を中心に—」

阮 雲星（浙江大学教授 国立民族学博物館外国人研究員）

本報告は、報告者が22年度民博において実施した研究課題「中国における無形文化遺産保護の言説、政策と実践」の研究成果の一部であるが、研究方法論の問題関心はAA研の基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」に共鳴する。

本報告は研究内容について主に以下のものを検討する。

まずは、中国の文化遺産保護及び「文化」構築における「文化生態」論を検討する。報告者は、現代中国における「文化生態」論は、1) 現地の住民・生活者による「文化」保護の「文化生態」論、2) グローバル化の負の影響から文化の多様性を守る「文化生態」論、3) 生態人類学の展開から見られる「文化生態」論であると整理した上で、これらの異なる文脈からの各論には、民間・民俗文化の重視から、そこにある生活者・伝承者に目を向け、さらに文化と社会・自然環境との関係、及び文化適応と変遷・発展に理論的関心を示し、探索しつつあるという共通点があると指摘する。

次に、無形文化遺産保護における「ナショナル文化生態保護エリア」実験の経緯と特色について検討する。報告者は最近の「ナショナル文化生態保護エリア」実験に至るまでの中国における文化遺産保護の試みを次の三つのタイプの「文化生態保護」実践として整理した。つまり、1) 「民族文化村」から「(民族)村寨博物館」への実践、2) 新「博物館」

理念から「生態博物館」への実践、3)「文化・生態・新農村」(総合的)理念から「民族文化生態村」への実践である。そして、それらの異なる内外的文脈で展開した実践の経験を受け継ぎつつ、国における一つの重要な全体的な保護方式として「文化生態保護エリア」実験が実施された側面があると試論した。さらに、閩南文化生態保護エリアと浙江省にある海洋漁文化(象山)生態保護エリアの形成及び保護実践を初歩的な研究に基づいて紹介・検討しながら、保護のトップダウン的体制と複数のセクターの協働的なメカニズムという特徴を指摘した。

本報告は研究方法論の問題関心について主に以下の考えを提示する。

現代人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関は、おそらく構築主義と関連付けずには論議できないだろう。そうするならば、実験人類学以来、内省民族誌と政治経済民族誌がマイクロとマクロ系の連関を代表するものとして展開しているが、これから「身体論」と「コモンス論」は「構築」という方法論から見れば、まさに「間身体」論まで深く検討するものとして、或いはマイクロ-マクロ系の連関に有効な中間的な概念・理論として注目すべきだろう。このような視点から、現代中国の文化遺産保護及び「文化」構築における知識人たちの言説活動は当代文化遺産学の一つの重要な研究内容と方法論にもなるだろう。

2)「キメラ化する地域文化—中国浙江省における政治と「古鎮化」現象をめぐって—

菅 豊(東京大学東洋文化研究所)

中国では、「古鎮」保護と開発にともなう観光化の進展によって、地域文化が、政府や観光企業という外部アクターによって客体化される一方、地域の住民自らによっても客体化され、変化させられている。本発表では、ここ数年で古鎮保護と開発が急激に進展した、浙江省衢州市江山市廿八都鎮を題材に、地域文化、そして、それを客体化する地域住民や地域外住民、および地方政府などの複雑なアクター、さらに、それらによって展開される錯綜する政策や実践といったものの「キメラ化」の現象を検討する。

「古鎮」とは、古くからの建築群や「伝統」的な文化を残し、長い歴史を有するとされる「伝統」的町並み群である。それは、文化のハードウェアとしての古建築(有形文化)と、ソフトウェアとしての生活文化(無形文化)が、一体として「保存」された空間である。その深遠な歴史イメージは、現在の中国において観光開発の重要な資源として積極的に利用されている。そのような古鎮へと街が変化する、あるいは変化させられる状況を、ここでは「古鎮化」と呼ぶ。この古鎮化の過程では、建築物や街路のみならず、住民の生活文化など含む古鎮全体でさらなる歴史性を来訪者に感受させる再構築が、現在さまざまなアクターによって執り行われている。古鎮では、新しい建築物の古風な造り替えや、元には存在しなかった「古」建築の新築がなされる。また、古建築は旅行客に地域文化を展示する「パビリオン化」され、さらに地域性を勘案した主題に沿って古鎮の特徴付け、演出されるという、いわゆる「テーマパーク化」もなされる。そして、その内部に存在する

地域文化は、「取捨選択」「変形」「デフォルメ」されるのである。

廿八都は、現在でも古建築を多く残存する「古鎮」であり、国家級の「歴史文化古鎮」「中国民間文化芸術之郷」となっている。中国において、各地の古鎮は文化政策の上から積極的に保護され、観光資源として開発されているが、ここ廿八都も同様の保護と開発が進行している。そして古鎮として整備されるなか、古建築がパビリオン化し、町並みがテーマパーク化した。

古鎮開発にともない、廿八都のさまざまな文化は、そのありようと意味づけを変化させている。現在、ツーリズムという新しい状況への対応によって、文化の新しい価値や用途が発見され、また文化そのものも発見されているのである。そのような文化の代表例に「剪纸（中国の伝統切り紙）」、「棕衣（棕櫚製の蓑）」、「銅鑼糕（春節の餅）」、「豆腐」がある。

さらに、現在、廿八都の地域文化として特産品化し、自他共に客体化を進行させているのが地域の食文化である。食文化は、地域の特性を表現しやすく、かつその文化の消費者である観光客に受け入れられやすい。古鎮に付随する個性的な料理、いわゆる「名菜」は、商品価値が大きく、ここ廿八都では、古鎮開発にともない、それを政府関係者や地域住民が共同で発見し、パッケージ化して廿八都の料理を売り出す食文化の特産品化が、ここ数年のうちに進出した。それは、もとより地元で賞味されてきた普通の食文化であるが、現在では外来者に向けて、そのエッセンスを抽出して提供されている。その提供の場として、近年、廿八都で活発化しているのが「農家楽」である。廿八都では、2009年に「江山市廿八都鎮農家楽聯合会（農家楽聯誼会、農家楽協会ともいう）」が組織され、2010年8月時点では、29軒の農家楽が開業するまでに増加している。そして、彼らは「廿八都十大名菜」として、観光客向けにアピールする特徴ある地域の食文化を選定した。

このような廿八都内部の文化の再発見と再構築以外に、廿八都と地域認識において入れ子状になっている江山市（西硯：硯製作）、衢州市（麻餅製作）などの外来文化も移植され、また地域の文脈に規定されない汎用性をもった「伝統」イメージを喚起する「根芸」などの外来文化も移植されている。

このような古鎮化を背景に、廿八都という街自体が、江山市政府はもとより、浙江省政府、国務院、国家文物局、建設部、国家旅遊局等々の政府アクターによって数々の称号と肩書きを与えられている。そして、またその街に住む文化の担い手も数々の称号・肩書き、そして褒賞を権威的なアクターから与えられ、社会的評価を高めるとともに、文化の客体化に自ら積極的に関与するようになっていく。その活動は、2009年以降、国家的な政策である「新農村建設」を下敷きにした、江山市の政府幹部が主導する「中国幸福郷村」プロジェクトによって、さらに加速されている。そしてその廿八都の古鎮化は、古建築と非物質文化遺産の保護のみならず、観光、およびそれ以外の産業・雇用創出、それにとまなう収入増加、住環境の改善（インフラ整備）、生活改善運動…等々の多目的総合政策に組み込まれているのである。そのようななか、地域文化も、その担い手も、さらにそれらが行う政策や実践もキメラ化しており、全体としては一つの像を取り結んではいない。このよう

な状況下では、従来の文化の客体化、あるいはツーリズムの研究で見られたような、民族アイデンティティの強化や文化の担い手の主体性、自立性の発露、あるいは反対に他者表象の被害、国家による文化操作などという説明原理は、単体では十分な検証力と説得力を持ち得ない。その地域現象を読み解く、視点や説明原理も、まさにキメラ化しているのである。